

澤 幸祐 (2013). 行動主義誕生100周年記念シンポジウム
“Behaviorism as the Psychologist views it” :
After 100 years. (司会) 日本心理学会第77回大会,
札幌コンベンションセンター (北海道医療大学).

澤 幸祐

日本心理学会は、本邦の心理学会の中では最も広い分野をカバーする学会であり、その年次大会は3000名ほどの研究者が参加する大きな大会である。本年は北海道医療大学が主催校となり、札幌コンベンションセンターにおいて開催された。本大会においては、本プロジェクトの助成を受けて行われた研究に関して発表も行ったが、これについてはRAである栗原彬君の報告に譲り、筆者が座長を務めたシンポジウム「行動主義誕生100周年記念シンポジウム “Behaviorism as the Psychologist views it” : After 100 years」について報告する。

日本心理学会第77回大会が開催された2013年は、John B. Watsonによる行動主義宣言から100年目にあたる。Watsonによる行動主義の提唱は、内観に頼った実験心理学に対する批判と自然科学としての心理学の出発点として大きなインパクトを持ったものであったが、内的過程を扱うことを棚上げしてしまったこともあって、認知心理学の隆盛とともにその影響力は随分と小さなものになったように受け止められている。本シンポジウムでは、関西学院大学の今田寛先生、東京国際大学の高砂美樹先生、東京医科大学の岡島義先生、駒沢大学の小野浩一先生を話題提供者として迎え、行動主義の歴史的展開や臨床心理学への影響、行動分析学として現在も息づいている行動主義の精神についてご講演いただいた。また、指定討論者として帯広畜産大学の渡邊芳之先生からは、方法論的行動主義など現代心理学は行動主義のインパクトから無縁であることはできないこと、将来的にも行動主義そのものが消え去ることはないのではないかといった点が指摘された。フロアからの質疑の中でも、行動主義の作法やこれまでに蓄積された知見が、過剰にないがしろにされているのではないかとといった危機感について指摘があった。座長として筆者も議論に加わって、これまでの100年を踏まえ、次の100年間に行動主義やそのエッセンスはどのように受け継がれ、また変質していくのかといった問題提起を行った。

本プロジェクトが掲げる、基礎心理学と応用・臨床心理学の融合という観点からみると、行動主義を直接的に標榜するということはないものの、やはり方法論的行動主義については多くの研究において基盤になっているものと考えられる。筆者の専門とする学習心理学と、行動療法といった応用的話題は、行動論を重視するという点においては共通基盤の上に成り立っているし、内的情報処理過程を重視する認知心理学においても、方法論的には行動主義的手法と無縁ではありえない。より包括的な融合的研究分野を考えるうえで、行動主義について考えることは有意義な

機会であったと考える。